

# 環境デザイン

de

## 医療の場を整える



戸倉蓉子

株式会社ドムデザイン 代表取締役

第1回

## 緊張感を和らげる 照明テクニック

### 連載開始にあたりまして

私は元臨床現場の看護師でした。それが今は建築デザインの仕事をしています。よく「なぜ全く違う仕事に転職したのですか？」と聞かれますが、職種は違うものの目指していること（使命）に変わりはないと思っています。その原点からこのコラムをスタートさせたいと思います。

私が看護師を目指したのは小学生の時。ナイチンゲールの伝記を読んで感動したことでした。そして看護師となり大学病院の小児科病棟に勤務しましたが、当時の病院はグレーの床、白い壁、白い天井……。殺風景な環境に私自身も萎えました。病気の患者さんにとってはなおさらに違いありません。

ある日、担当していた小学5年生の白血病患者さんのベッドサイドに、彼女が好きだと言っていたガーベラの花を一輪飾ってみました。

「看護師さんありがとう」

彼女は初めて笑顔を見せてくれました。そして血液検査のデータも良くなり回復へ向かってくれました。

私はハッとしました。

「患者さんに必要なのは薬や化学療法だけでなく、明日に向かって治ろう、生きようという気持ちだ」

一輪のガーベラが教えてくれたように、環境は患者さんに前向きな気持ちを与えてくれるもの。その時から私は上司に「子供たちが落書きできるような壁をつくりませんか」など、環境改善の提

案をしました。しかし新人ナースの私には何の力もありませんでした。

よし、それなら自分がやる！

病院を辞め、建築の世界に飛び込みました。道は平坦ではありませんでしたがイタリアにもデザイン修業に赴き海外の病院を見学して歩き、帰国後一級建築士を取得。そして起業して30年になります。その間、日本だけでなくカンボジアやベトナムでも病院、クリニック、高齢者施設のデザインをさせていただきました。5年前に日本看護協会出版会からお声掛けいただき、『医療の場を整える環境デザイン』という本も出版させていただきました。

デザインという「お金がかかるのではないか」とか「医療がよければ必要ない」などと言われてきました。しかし、思い切ったデザインを取り入れたことで全国に名を知られるほど有名になった



ミラノの生き生き暮らす高齢者の家

「Casa Verdi」

待合室を間接照明で  
やわらかくする工夫

「黒沢病院ヘルスパーククリニック」



間接照明と光だまりで  
ホテルのような病院の玄関

「神戸大山病院」

り、従業員が定着し良い人材が集まるようになったりと、成長していく病院を目の当たりにしてきました。

「医療の場における環境デザイン」とは患者さんの回復を心から応援する病院・診療所側の気持ちを表現するものだと思います。患者さんの緊張感を解き最良の医療を受けていただくために大切なことでもあります。

今回から6回シリーズで、院内に比較的簡単に取り入れられるデザインのポイントをお届けしてみたいと思います。

## 大切なのは……

患者さんは緊張感たっぷりで待合室で順番を待っています。それが時として待ち時間の不安やイライラを招くこともあります。イライラは心拍

数や血圧を上げてしまいます。落ち着いて待つていただくことは診察の質を上げるためにも大切なことだと思います。

待合室の照明を見直してみましょう。

大切なのは

- 1) 色温度
  - 2) 光だまり
  - 3) 包まれ感
- です。

## 1) 色温度

色温度とは、光の色合いを数値化したものです。ケルビン (K) という単位で表され、数値が低いほど暖かく、高いほど冷たく感じられます。たとえば、ろうそくの炎や夕陽は見ているだけで心が穏やかになりますね。それらはおおむね 2,000K。

それに対して日中の太陽光は 5,000K、晴天の日陰は 8,000K という具合です。

穏やかに待つていただくための待合室は色温度を低めにし、診察室や処置室など作業性の求められる空間は中間～高めにするなど目的によって使い分けることが大切です。

昨今は電球や蛍光灯に変わって LED 照明が多く使われるようになりましたが、注意点としては輝度が高いので「まぶしい」とクレームが入ることもあります。特に患者さんが診察時に横になった際の、天井の LED ダウンライトのまぶしさには注意が必要です。残像として目がチカチカ、目をつぶると満天の星空のようになってしまうことがあります。そうすると正確な診察ができなくなるケースも出てしまいます。

配慮としては、ライトの器具の下部にカバーが付いたものを選ぶとよいでしょう。また、すでに LED のダウンライトが設備されていて、本体の交換が難しい時は、既存のライトのつばに装着できるカバーもありますので試してみるのもよいでしょう。

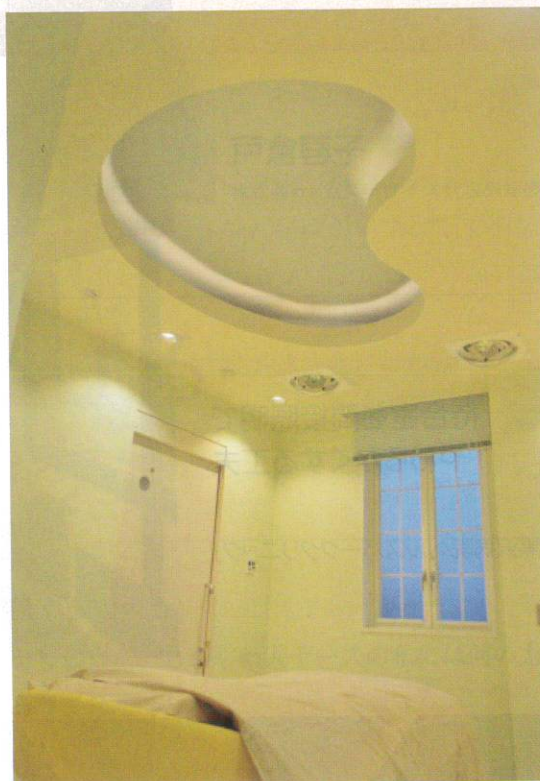
## 2) 光だまり

光だまりとは、空間全体を均一に明るくするのではなく、暗めの場所もありつつ光の居場所を効果的につくっていくイメージです。単に壁にスポットライトを当てることもあります。光の先に目的物をつくるとより効果的です。

たとえば壁にアートを掛けてスポットライトで照らしたり、植物を置いて床から葉を効果的に照らしたり。床置きスタンドなど低位置の光もリラクセス効果をもたらします。光だまりを上手に使うとホテルのロビーのようにくつろげる待合室になります。

## 3) 包まれ感

包まれ感を出すには間接照明が効果的です。直接光源が見えないので柔らかな光になり、穏やかな雰囲気生まれます。天井を折り上げる場合もあれば壁に入れる場合もあります。形も四角だけ



分娩室の天井が子宮の形の間接照明

「ファミリー産院君津」

でなく、丸や楕円も可能です。弊社の事例では産科の分娩室に子宮を形どった間接照明をつくりました。お母さんとこれから生まれようとする子供をつなぐ場所である子宮を抽象化しデザイン。出産に臨むお母さんを応援する気持ちが込められています。

診察が始まると待合室の患者さんの様子は観察しにくくなります。患者さんは、訪れた病院・診療所での配慮の足りなさについては、我慢して言わないことが多いものです。照明の光がまぶしすぎないか、球が切れていないかなど患者さんの身になってチェックしてみることは基本として大切です。度が過ぎるクレマーは問題ですが、病院・診療所側の配慮の足りなさ、クレマーにさせてしまうことも実はあるのです。

一度院内を見回してみてもいいでしょうか。基本的なことでも意外とできていないことに気がつくかもしれません。

### profile

とくら ようこ：ナースとして慶應義塾大学病院に勤務後、建築家を目指しミラノの建築大学に留学。帰国後一級建築士取得。現在、女性だけの設計事務所、株式会社ドムスデザインの代表を務める。感動のある医療環境を多数デザイン。2016年、ベトナムにドムスインターナショナル設立。

一級建築士・看護師・イタリア政府認定デザイナー・宅建物取引士